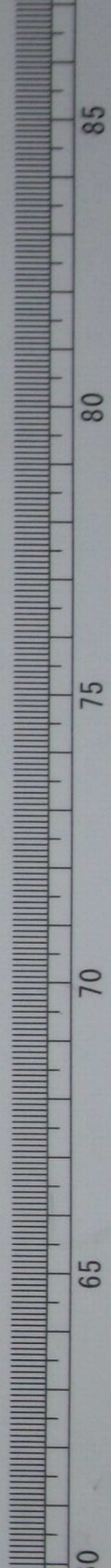


句  
兄  
弟  
上

特 別  
14  
3157  
4(1)



14  
3157  
4(1)



句兄弟序

近ハ轉ナリ轉ハ反ナリ之記セリ  
よリノ案スル句ト其ノ類作新  
古混雜シテハ分ルコトモ  
ハ諳シカクモ一統スル一  
言ハ一守ル地志深  
厚乃吟之趣を狂一  
点の付カズ我ハ一

侘り物と暮しとあるところ  
むかし今に高き芳しき  
あはれ句品三十九人を  
あつたててしるす  
おほいけの多のさる方  
乃式にゆきし私に  
一冊をよみ物に  
加へたこと此に  
註解を

換りの流俗に  
向壺に馬を  
聊に遊るを  
の難をの  
式のおる  
かゝり子  
切字の  
逸典ありし  
祝籠の侍

おろくく——は乃の譬喩方便  
もれを信能一智也法句見  
中しちちなる海をさるるありし

昏の名々しく侍る

元禄七甲戌稔来屋初五

晋其角



一番

兄

こ波つ〜とほろをのよ〜野山

負室

弟

こ波つ〜とほろをのよ〜野山

晋子

花満山の系を上五字并云とて  
芳野山と決定しる所作者の自  
然地をゆするりてそ訛諧の以深山

白上

三

あるん——花のうらむとちよあつて  
ちるもらくくとしる和句や先ツくと  
てふとの云下——或又持せしもの  
難云吉野山一句の本新く上五字  
七字まじハ只ありの初なる——ちるもと  
撰のうるようつ——本をさぬ句を  
へ——答云句ハ其真を因はへよや  
景情のえあるといふる雜談集  
論せばことくや近くいく先年  
の星やさくく定めぬ山くくと

キ——句當れよあつて興感せしり  
芭蕉翁吉野山よあつて時山中乃  
義景よけをされ古きあつて信を感  
せ——叙め星の山あつてよめあつてよ  
け句のうらやうくさくはは文通ふ  
P——しげる是をくつうの面目となりて  
おふ時ハ満山の花よあつてよ一句  
乃言ハゆしこやむ花の前後をよ対ハ  
聊も句心あやまるへくハ沈佺期  
句を盗む癖とハ等類をのく違ふ

二番

兄

拾穂軒

地主くハ木の間の花の都一うぬ

弟

京中へ地主のさくくや飛胡蝶

老師名言まらうく反持して市中此蝶を  
清水の落むと刃なりくも木ありと  
云ふなりて好まがりて侍と紙衝

こころよみぬてむのるを花おころやうよ  
つえの先後の句まらくしや花の蝶  
よみくも 蛺蝶飛来過墙去却疑春  
色在隣家 他例多く因ゆりとも予  
京の二字紙心けれとむ紙まらう

三番

兄

素堂

又是よろしき糸一見と かりるり

弟

亦是うちも本屋一見の片一式

遊子行残月さや花よおほきし人の  
去の名跡を惜み人心をうらむは  
予う句ういふよさういふてまはあ一見  
といふ花のかへるさびさういふへ金く等  
類あふいとさういふりさういふ平生  
口癖あふいとさういふ格子の取らに  
云題よてさういふつさういふあふ  
——は白さういふかふるさういふ五さういふ

云のへさういふ強弱の辨をわつものや

四番

兄

肅山

祐成の袖引のさあむさういふ千鳥

弟

むらさういふ其おのさういふ——虎の汗モト

袖引のさういふ一衣洗濯のめさういふ  
さういふ——高名乃士あふか破スル襦袍

試著て孤路に耻さる勇を思ひ合  
ふるまや村のふるまの友とてその志  
を志のたれ一句は感概ありようと  
其おの虎ももたに志のたれ一句は  
引のくしはんとおもひたりてその花の  
川ぬを羨このうらみ追又やと先ハ  
各句合意り辨之兄の句平寒しと  
りお字のあつて同じ侍とこころの

句弟あまし

### 五番

兄

ほろ

雨の日や門提てりかきつと

弟

ひ廉おけりよと提もる 杜あ

杜若雨潤の一辨め節りささよく云  
立しなも難していそ雪中の梅花を  
このさ一周年よはけりを折 添俗の  
句中よくまれば一句の外平一作

の上

ト



さすしとされと向上の句なり終てハ野  
と定やけしし其心ゆしゆあまとい  
多うる中しり杜若景物乃一品あま  
と呉もよりと眞を取ぬへくや雨乃  
杜若とおまひあしとんら句他のこ  
なりしとまぎのまへお所し老功の  
作者哉譏りてしよハあしは同けて  
おくと見え送るしと我宿り  
入来る心平し及ユしとたのて下もそ  
のよるし色をももまを厭けれ

さあ哉すれすけと下あしと  
かり往と来との二字ありて力哉  
わづらしとと判談せん人あしとあま  
へしと回答の句なるおへつりて

六番  
松棘の愚心よを戸侍

兄  
曲水

三弦やしと鳴り山哉佳月雨

牙

と味除や福衣よくもむ五月ぬ

白上

さしつゝしの長閑よりくはんと讀ける  
さしつゝよりくはんと讀ける  
あるもさしつゝよりくはんと讀ける  
因おるも同くさしつゝよりくはんと讀ける  
の玉火よがさしつゝよりくはんと讀ける  
思ひよがさしつゝよりくはんと讀ける  
りありありとさしつゝよりくはんと讀ける  
侍るおるもさしつゝよりくはんと讀ける  
ひたりとさしつゝよりくはんと讀ける  
はさしつゝよりくはんと讀ける

七書

急ぎのうらみ決せしめ

兄

禪寺の善なり心や浮氣主

弟

空も奇や心哉をりうらみ花主

おれ句子さしつゝよりくはんと讀ける  
さしつゝよりくはんと讀ける  
云係一とれん花見く庭の乱氣哉

よせこつて毛吹時代の老僧をよぶ  
所をたつとて花やもて身まゝと  
句よりハ得真のち哉とてよや

八番

兄

露沾

信惜太師走の菊は齡つるを

才

秋よりあへ師走の菊もすま白田

中七字 <sup>モテハヤ</sup> 詠を以て一筆如昏の惜

まろく詠ぐて分て霜雪の凋むる  
後を對をいへつるも菊出の  
秋後の菊はよそよなり久次女と  
句とてちらよ立り菊の情いふ  
一て光陰を惜むと待とてけい

九番

とてや

兄

岩翁

遠磨忌や朝日は僧の影に師

才

なき庵の志や自剃の法なるの鏡

論スレ俳句ヲ如シ論カ禪ヲ日乃影と水影

美ぶるか—空房獨坐の似し

十巻

似ぬ氣二句一物な

見

干瓜やけのひるるに於小舟

カ

ほ—瓜やうらけは春塗小舟

此舟ハ古来掉レ既ノ秀ク他ヲ一ト

と云ふくよ云たるはと等す其の難非

のう映るく是く侍もも干浮の面

中し詠する縁中すうりておひり

つわけし干ももゆある兄の句を

うていとも中あり—舟の形容

汝と云ふ字のはいふよと及轉せら

みる人もオオオオ

懐古ヲ吊ル古ノあらをしは

十一巻

の上

上

兄

杉風

屋形舟上りて橋教子と暮利

才

屋形舟に就てぬ女中出よるり

暮春の至情とよむぬハ様とるりを  
色もむてと伝しよるりて風光のつ  
つれりうらみの人のあはれぬるり  
浅州上野と向對して渭北春天樹

江東日暮、雲とわ白紙かきてむ見  
ぬ女中ちりあん後う橋しう橋と  
おもひやとてえげ舞子うらりてるり  
春をたかくさあけん山水道途の人  
十二首

兄

杜園

馬ハ鳴き牛ハ夕日の北へを

才

紫ハぬきて牛ハさあうりてるり

け二句ハかゝるびを云ふらうと云ふて  
たれ業多く閑く候へばと云ふと云ふと進  
半後ク歩みて斜陽のこぼりりと見  
風景とほ葉のつくのおもくぬて牛ハ  
さあゝつ時向をあらへるあぬ  
そとくうよつと伝ふや

十三番

句の面よて兄オとていふ

兄

神叔

うつと火よ土器おき——白このな

弟

埋火やうらびかけていちうやよ

兄ハ炉邊の閑哉落して院邊の交談  
もてたりしるあつとあるあつとゆ言ふ  
おれといふいぢり候いもあつとと云  
うんちん乃真をわの俗言よれあて  
白ルとてふ句のまほひをわらぬ葉  
火三盃乃の——やと所ふ  
あつとより冬夜即事の交結し

句上

句下

十卯夜

兄

古梵

この村のあまうらほちを鳴らす

弟

あまうらほちをみるんたまうら

窮民はあまうらほちの神様は  
下愚のうらほちを用心を用ひてひまふ  
あまうらほちの音うらほちを哀れく

あまうらほちと悲れんぬ農の  
至誠をよそよそその心を起す  
あまうらほちの性をいつうつーげもの  
そと憐れんぬ列子は鷗心をあまうら  
あまうらほちの事實をよそよそ

十五番

ぬへー

兄

許六

人足下 賢師乃 裕や衣 更

弟

は種も島の下着や衣かえ

二句とも平一目ふるをよもみり一思ひ  
よせしるし自句節小袖なほもきふく  
やと勘弁や一つとも教白のけりあふ  
夜ふといふてハ花な一は種と教る所  
とのふかきす一さふことなれも無きよ  
ふらとあるゆへに一列に流り

十六や

兄

去來

浅茅生やゆくりをるむむの声

弟

ゆくりをる松虫とるは浅茅哉

明(あ)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)と(と)る(る)て(て)聞(き)く(く)虫(む)の(の)声(こゑ)の  
あ(あ)ま(ま)ら(ら)う(う)な(な)ま(ま)ら(ら)う(う)あ(あ)ま(ま)ら(ら)う(う)な(な) 寂(じ)蓮(れん)  
近(ち)く(く)虫(む)の(の)声(こゑ)を(を)き(き)て(て)秋(あ)き(き)情(じやう)を(を)う(う)る(る)  
心(こゝろ)を(を)一(いち)句(く)の(の)上(う)に(に)云(い)流(り)て(て)ゆ(ゆ)くり(り)な(な)  
し(し)る(る)人(ひと)咽(のど)氣(き)の(の)ま(ま)よ(よ)く(く)く(く)る(る)種(たね)



遠近わらへるおぼろけの影は  
あつらひも各自各々をさぐる

十七首

兄

外我

海棠乃て左の満きり夜乃月

亦

海棠花のうつやおぼろ月

暁をさるる云字は満ると云字は通  
ハ一と海月のうつやまを春魚  
なり然れ一句のこころしお所ある  
自句もあて優魁よ句のありを  
起向もあつらひもみらるる  
云る所をうつや暁と云てみする  
時ハ暁や煙花や雪と立のびる  
境は分別はる一先をのいつる  
詞ハ吟心はる一おぼろけも  
精さのこころや

十八番

兄

立圃

むらさきよきよなるる 童里うたふ

片

花ひより袂に御乳のよきし

至愛乃心より作者の功をあはれし  
一つふもゆりよ詞のやすらふたまる所  
又あふ妙句たきと都鄙よけりて

句に曇るなすしきれくあめつ云うけの  
歌句を珍賞せりていつくま古版  
の書に埋もる侍を帯款羨して  
古人の深察を再轉せりお乳の人乃  
手出にそす物いなぬ童里たのれく袂に  
次かほ童子とて手紙わらうて類句の  
雅を迹きぬへりてうらあふみきり  
もちてやうとよくと答ぬりぬと昔  
久んあど塵又つけりてうらあふみきり  
思ひやせん成長をうらあふみきり

心もたうりもあしせまうや同惜少年春  
千載不易の句をなす可くして轉換す  
ちのれと評ふはむらうや

十九番

兄

亀翁

病を人を治し起し余りたふ

才

酒をよきと蒲団利ハキり茶の香

冬解百日を二百句より友吟せし時  
夜く笑酌の即真に耐寒のころ  
わらわはあはれと客と昔趣

廿番

くらま侍

兄

赤右衛門

妻

啼よと人笑ゆりくすはととと

才

何もこそハ木兔笑へ本中

人情を儼て笑へとらへる傳きと女の  
質ちやう此句いをものぐま待宵の春言  
ふ夜よひまきし人口よあるおへりよ  
類作の笑えもななく一人一句よとすち  
侍もいへるやちやく笑えなう心のと  
さう福よ迎曾露穴とよ所り止  
宿しし月やみのおはつるあきそ  
鶴鳥の写を笑ぬ神々ま候し  
ぬえちやや此曉のほもくあは  
と云てめしなつる指をさすりあ

しれど新あつと肌よと練りて芳雨を  
のくくま程の本のうよみけけの  
こゆりて日影をわくはさぬぬを色く  
乃るれ笑ひあよめるのちうして飛  
ちりけるなおりく思えねえ笑ついま  
と云ふ奴あとおひも侍りてかこの一  
よりとえ合しり蜀の魂といへて誠  
なりすぎ、帝血とつくりしこそちり  
よそむけて郭公笑ちとらへるハ私あ  
ゆ（さうらきと和子のあさこのたすけ

少〜してその花をち〜に細脛ハナを大  
長刀よりけてもよもあ〜くねと〜等  
能辨の〜つ〜く〜れ毒も先へ〜  
又〜と答〜を魚〜〜〜  
第一〜兄弟の論は及ま〜

廿一番

兄

歌棠

つ〜ふ〜や牛と〜ま〜相撲取

弟

上子かと名も優美也妻おひ取

句の裏へ〜け〜りこれと句の中より  
一手を〜〜牛と〜字よりけり

廿二番

兄

宗因

人け〜よ〜や〜月か〜知れ

弟

昔〜〜や〜月〜〜

杜甫子字血脉の格ありむ意味  
ある字あり句をくくその字の中  
をくくめ入る者付るその格より  
くく句血脉の格をくく合く  
くく句感の老衰をくく合く  
指あてくくめあくめくくめ  
およよきくくめ橋のくくくく  
初なるのくくくくくくく  
老とありめくく合く老熱の  
深思をくくくくくくく

差ふあく一字能階の血脉  
くくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
血脉通達くくく

廿三句

兄

東順

くくくくくくくくくくく

止

註

弟

書り入月やきりつゝまほし

七又三十年前の句や俗うつゝこれ  
とも古語をきこふよりこゝろあつら  
句論子及守死の切とすゝめんる  
及なより見せし書のかみよ  
かよ入て侍の山子もつゝは  
作とつゝの菊ハ子をちけんてクスリ  
るハ歌こつゝをてゝあふふつゝ白

乃出する一とみちるはる一と思ふの

其の番

おの追善

兄

仙化

はるくくと尺魚圖の免やあのみ

弟

つぐくと空のうもよや免の

こゝろのつゝ決断せりあつゝ  
つゝこゝろをる魚圖の免を空に

の上

下





ひきまゝを我多うと

おのほよんたり

廿二日

元

儀道

海を渡るといふ事よと衣や新鼓

分

伊勢の法はもて誠新たふ

一と身都まてあを味一の  
片ま咬とまえ一瓢單の言が

ひて面白く知らげを酒のよ者よと  
口つさけるあはれとま来り

舞うせわのよみせん新よ  
と中身一げのちげ白濁は色  
志進と衣やと云りしてを移ぬ  
曉ら思ひしう一自句寒夜行の  
信を却てふと流の音声の  
まて物よのむら一あさくれん  
今めをさる白作りよ心うす  
解防のしさを鳴して邪路は

右止

言

志ありし句を成る人の感をかゝり

廿七番

兄

越人

ちるの心安きよ眼函子の世

弟

ぢうはるハぬも本のおまけの世

尋常の詞よりして中を字よん俗  
を立しるハ荷分扱人等ぬも新の

子癖也是ハ別僧とらふおまを  
一句のこよりをくせをうも面白  
風もあまはとくと死のころを  
自然ならんうて兄を新スルハ  
あゝ此死の念なくちうあるを  
むとスるお乃あまうもろく是ゆる  
のわらや

廿八番

兄

玄札



あゆむのうぬあきあきあき

廿九番

兄

秋色

舟深木乃ちあはれもろねりな

中

永ちと我枕のそ路や一圍乃み

牛島とらふやうりよ於人ありその

かゝ我回て日くねし歸る時ちらら  
舟よ乃る川く海のきりきり月よ  
あき水の面もらふとあきあき  
こくねりまうきりきり  
りよ永路の枕よとあきあき  
よりそあ外れとあきあき  
をとおひやるひあきあき  
国の外やうぬあきあき  
あきあき枕のつあきあき  
そりしとあきあき

吾一の筋の多へ

三十番

兄

春澄

草刈や牛よりなほとおとたん

亦

牛子の<sup>コメコ</sup>ぬき<sup>コ</sup>はすふ妙なりを

通船乃馬を引くをくわの葉の

名よそくも京流布の他ありぬと  
文字の所着をふれすや新古よ論を  
立てし<sup>コ</sup>たみ<sup>コ</sup>を<sup>コ</sup>事<sup>コ</sup>田<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>辨<sup>コ</sup>  
なりし<sup>コ</sup>も<sup>コ</sup>名<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>か<sup>コ</sup>る<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>よ<sup>コ</sup>せ<sup>コ</sup>ぬ<sup>コ</sup>  
あ<sup>コ</sup>ら<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>も<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>つ<sup>コ</sup>け<sup>コ</sup>ち<sup>コ</sup>も<sup>コ</sup>ん<sup>コ</sup>  
是等ハ俳諧乃推原也

三十一番

兄

東山

おしめやふらぬあよのあつと



空らふ字まで面白く立のひ侍る。  
川の菜つむ大言人のりるまゝも  
ひもおあかく秋の色やゆらん  
君の野遊の海さぐりける所は  
とひ到ると奥あき下船のさぬ  
二十三年

兄 尺牘

須磨乃山句下力ふーかんとる

米

いふれ山ぐしるよ何を誂はる

都難波のまを秋を控りては戸の石は  
吟ひける日記よりえんし侍り也無伴  
獨相求<sup>レ</sup>伐木下この幽景をそとへて  
はらまふくまふ鳥のあゝ其所は  
斤似より浦と去まは山とらへる其場  
たのすしーいはらまふ字やこれの字  
心をつげん教句の馴れあひも  
心所不<sup>レ</sup>足有餘<sup>レ</sup>趣とすふかせまふ

白上

三十一

にまかたなりと女を風情を記  
浦より八束さくらともりつらしるま  
何をともあつれと身は中目よう  
けすの境自然を志すん

三十四番

兄

西鶴

鯛ハ花ハたぬ里もあまの月

片

鯛ハ花ハたぬ里もあまの月

花をききし心よりそ二千里の外  
心平かよひ一句のそ尾跡類なり中七字  
力をかえて啓栄期り樂なりあまの月  
をこすは江干し生まて住りぬのく海  
なを月をうそおの魚のあまの月けま  
初せし字景嘆時のおもひ感今懐古  
未二年字世の月をえるる鶴  
と云ふえんおまをそハあまの月  
今ハ故人のやなり成ぬ

三十五番

の上

註



兄

宇白

本堂の御座り一室窺ひてはるる事

也

そはししてあめ鳥や蜀泥

短歌の道なきを恨みてたかくつたふ  
ゆる志のあたらふ帯よすぐらうしけ形  
ハ郭公のよびなきも題一色の中  
賞物あをえん 縦横をわら侍りま

俳諧より業へ入るははるこ一はた  
り物よあそびて心もゆるしやけよか  
下へえゆるすをくや

郭公啼く飛つるをふ一蕉  
つらきやあやの音も 時多角

此神を俳諧よりおもひ入るも  
是等の格法をばさせんハ縦横と混  
雑しりとも句は下へそむくへ  
縦ハ花月鳥月雪柳楓の折り  
あそびて詩より連俳とも通用の本



井の柳まよひを桐の一葉哉

風一翫の如きよよひてこよひを恨と  
久るその色自下とぬらこ一他よほ  
露うー結るよよのありの柳まよひを  
ささひてこちをさる風のかきぬりとよよの  
くりりあり中七字のまうけを延句幽ま  
おもひてお合一五あまこころよ連  
俳をわくらこころ

風まらしむよの桐の一葉哉

とつて正平連歌や自句其心哉  
杆格一て句面下かぐらふ

井の柳まよひの桐の一葉哉

少すすもた句の助もゆる糸と色の  
字を自あてりては糸の句立を分  
りり一字の辨ハ趣の微を合もあや  
とらや折火の影をささぶがよ一  
てよはのえやうすべて同一

三十七番

元

僧吟市

丸会羽くくぬ雪やふこの山

卯

青漆を雪の活也や丸会羽

古伏千州言ぬ雪赤くぬ袖は  
とらふ形より中をまきし  
尺くくり子をわらう句形を  
續腰の格ともりるや

三十一番

兄

轍士

風の音はけりこの下り石を

卯

冷酒やもーその下弦石くみ

一句の涼味をうめよ人皆苦炎熱  
我愛夏日長薰風自南來殿閣  
生微涼東坡を百世の師とて云  
ふや

白上

絶くよ夕を暑のさゆらふくよ思を  
合くとも千起外せしむさをつらく  
笑るよとひふせし入集の歌と歌く  
魔モタイを撰て辛吟をさるむ返書  
斤及びぬ藝も根あし青袖あり  
小室をさるふをぬ他觀の人石上  
詩を題して緑苔を拂せし  
ふのーみまをさる

三十九番

兄

三首子

おろろくは猿の歯白く岑の月

介

芭蕉

塩鯛の歯莖もきく魚の店

是くも夕の月とらふおよ山猿叫テ  
山月落と作らるる物すくさ巴  
峽の猿子よせし夕の月とらふ  
ちろと返衣ホス色と作らる詩の余情

ともしよるや此句感のうらまへ塩  
鞠の齒のむら出ると冷しくや  
おもひよせられえん表零の形よと  
ありて老の果年につれとと  
をめつと五あ字を齒のたとへて  
とつと活語のめを志とつと其幽深  
玄遠平達せる所好いなるて  
あるく——け句ハ猿の齒とやせし  
合せしとつとあつとしかつとつと  
侍る人海士の齒の白よハつと猫の

齒の冷しくとつと似て似ぬ思ひ  
よりのおも句よハ成す——おもつとつと  
作とつとつとつとつとつとつと  
て師の句才と分甚極骨をけと  
侍る師役もつとつとつとつとつと  
自評を用ひす——句はをのぶこの  
後及轉——つ猫の齒白——齒の齒  
つや——つとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつと  
あつとつとつとつとつとつとつと

味を好まぬとて味は雅とて下  
皆をのまきり煉磨たれと世致句  
一うのゆよならん人をむと手  
のわらうをききる

